

一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1

甘子Ⅰ遺跡・甘子Ⅲ遺跡

2006年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1

廿子I遺跡・廿子III遺跡

2006年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

一般国道9号は、京都府京都市を起点として山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路であり、山陰地方諸都市を結び、沿線各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所においては、益田市内における一般国道9号の慢性的な交通渋滞を緩和し、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、益田道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成13年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成13年度から14年度に実施した廿子I遺跡・廿子III遺跡の発掘調査の結果をとりまとめたものです。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成18年3月

国土交通省中国地方整備局

浜田河川国道事務所

所長 宮原慎

序

本報告書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成13年度から平成14年度に実施した益田道路建設予定地内の廿子Ⅰ遺跡及び廿子Ⅲ遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

この調査では、弥生時代のものと考えられる建物跡が確認され、この地域の歴史を明らかにする上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、この地域における人々の暮らしやそれを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として学校教育や生涯学習などの一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の発刊にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所をはじめ、地元の方々ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢 卓嗣

例 言

1. 本書は、島根県教育委員会が平成13年度、平成14年度に実施した一般国道9号（益田道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査、廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡の報告書である。

2. 発掘調査地は下記のとおりである。

廿子Ⅰ遺跡 島根県益田市飯出町1673番地外

廿子Ⅲ遺跡 島根県益田市飯出町1662番地外

3. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

平成13年度 現地調査

〔事務局〕 穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田 融（同総務課長）

川原和人（同調査第二課長）、今岡 宏（同総務係長）

〔調査員〕 今岡一三（同文化財保護主事）、田原淳史（同主事）

川崎英司（同教諭兼主事）、板倉芳朗（同教諭兼主事）、寺尾 令（同臨時職員）

田原修一（同臨時職員）

平成14年度 現地調査

〔事務局〕 穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、ト部吉博（同副所長）、

内田 融（同総務課長）、川原和人（同調査第二課長）

坂本淑子（同総務係長）

〔調査員〕 田原淳史（同主事）、川崎英司（同教諭兼文化財保護主事）

板倉芳朗（同教諭兼文化財保護主事）、寺尾 令（同臨時職員）

平成17年度 報告書作成

〔事務局〕 ト部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務グループ課長）

宮澤明久（同調査第2グループ課長）

〔調査員〕 田原淳史（同文化財保護主事）、谷 敬（同教諭兼主事）

4. 発掘調査（発掘作業員・重機借り上げ・発掘用具調達・測量発注）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕 斎藤義徳、藤井敏治

〔事務担当〕 井戸喜久代、池野真山美

5. 現地調査及び報告書の作成に際しては以下の機関、方々から有益な助言をいただいた。（敬称略・五十音順）

木原 光（益田市教育委員会）、新松晴美（益田市立歴史民俗資料館）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、村上 勇（広島県立美術館次長兼学芸課長）、益田市教育委員会、益田市立歴史民俗資料館、飯田自治会

6. 掘削方位は測量法による第Ⅲ系座標により、レベルは海拔を示す。

7. 第3図は国土地理院発行の1/50,000（益田・日原）を使用した。

8. 本書の執筆・編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力・助言を得て、調査員が協議・分担して行い、文責は昌次に明示した。
9. 本書に掲載した写真の撮影は調査員が行った。
10. 本書掲載の実測図・出土遺物・写真等は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡例

1. 本文中、図版中、写真図版中の遺物番号は一致する。
2. 本報告書における実測図は、下記の縮尺で掲載した。

遺構実測図	S=1／15、1／30、1／40、1／60、1／80
遺物実測図	S=1／3
拓影	S=1／1
3. 遺物実測図のうち、須恵器については断面を黒塗りにしている。
4. 遺物観察表の色調は「標準上色帖」を参考にした。
5. 本報告書で用いた遺物の縦年表は、下記の各論文、報告書を参考にした。
(弥生土器・土師器)
松本岩雄「石見地域」「弥生土器の様式と縦年一山陰・山陽編一」木耳社 1992
山本一朗「山口県の土師器・須恵器」周陽考古学研究所
(須恵器)
島根県教育委員会「石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 1992
(陶器・磁器)
陶器・磁器類全般については広島県立美術館 村上 勇氏よりご教示いただいた。
白上焼・喜阿弥焼については益田市立歴史民俗資料館 新松晴美氏よりご教示いただいた。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(田原・板倉) ...	1
第2章 遺跡の位置と環境	(田原・川崎・板倉) ...	3
第1節 遺跡の位置		3
第2節 地理的環境		3
第3節 歴史的環境		3
第3章 調査の経過	(板倉) ...	7
第4章 廿子Ⅰ遺跡	(田原) ...	13
第1節 調査の概要		13
第2節 調査の結果		13
第3節 まとめ		14
第5章 廿子Ⅲ遺跡	(田原) ...	15
第1節 調査の概要		15
第2節 調査の結果		16
第3節 まとめ		25

挿図目次

第1図 益田道路建設予定地内の遺跡 (S=1/40,000)	2
第2図 遺跡の位置	3
第3図 周辺の主な遺跡 (S=1/100,000)	5
第4図 やばらⅡ遺跡土括1実測図 (S=1/40)	8
第5図 やばらⅡ遺跡遺構配置図 (S=1/150)	8
第6図 恵比寿Ⅱ遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)	9
第7図 恵比寿Ⅱ遺跡 (T22) 土括実測図 (S=1/60)	9
第8図 廿子Ⅱ遺跡 (T2) 土括実測図 (S=1/80)	9
第9図 廿子Ⅰ遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)	9
第10図 廿子Ⅰ遺跡土層図 (S=1/60)	10
第11図 廿子Ⅲ遺跡調査前地形測量図・トレンド位置図	11
第12図 廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡調査区位置図	12
第13図 廿子Ⅰ遺跡遺構配置図 (S=1/150)	13
第14図 建物跡実測図 (S=1/60)	14
第15図 廿子Ⅲ遺跡遺構配置図 (S=1/300)	15
第16図 建物跡1・2遺物出土状況図 (S=1/60)	16
第17図 建物跡1・2出土遺物実測図 (S=1/3)	17
第18図 建物跡内砾出土状況図 (S=1/15)	18

第19図	建物跡1・2実測図 (S=1/80)	18
第20図	土括1実測図 (S=1/80)	19
第21図	土括2実測図 (S=1/40)	19
第22図	土括3実測図 (S=1/30)	19
第23図	廿子Ⅲ遺跡出土遺物実測図(1) (S=1/3)	20
第24図	廿子Ⅲ遺跡出土遺物実測図(2) (S=1/3)	21
第25図	廿子Ⅲ遺跡出土遺物実測図(3) (S=1/3)	22
第26図	廿子Ⅲ遺跡出土錢貨拓本 (S=1/1)	23
第27図	庄屋東遺跡出土須恵器実測図 (S=1/3)	26

表 目 次

第1表	益田道路建設予定地内遺跡一覧表	1
第2表	調査工程表	7
第3表	建物跡出土礫計測表	18
第4表	廿子Ⅲ遺跡出土錢貨計測表	23
第5表	建物跡出土遺物觀察表	24
第6表	廿子Ⅲ遺跡出土遺物觀察表 (弥生土器・土師器・須恵器)	24
第7表	廿子Ⅲ遺跡出土遺物觀察表 (陶器・磁器)	24

写真図版目次

図版1	上：廿子Ⅰ・廿子Ⅲ遺跡全景（西から） 下：廿子Ⅰ・廿子Ⅲ遺跡全景（南から）	28
図版2	上：廿子Ⅰ遺跡建物跡（炭化物出土状況） 中：廿子Ⅰ遺跡建物跡 下：廿子Ⅲ遺跡（調査前）	29
図版3	上：廿子Ⅲ遺跡建物跡遺物出土状況 下：廿子Ⅲ遺跡建物跡1・2	30
図版4	上：廿子Ⅲ遺跡建物跡2堆積状況 中：廿子Ⅲ遺跡建物跡内集石 下：廿子Ⅲ遺跡建物跡調査後	31
図版5	上：廿子Ⅲ遺跡建物跡出土遺物 下：廿子Ⅲ遺跡出土遺物（弥生土器）	32
図版6	上：廿子Ⅲ遺跡出土遺物（須恵器・陶器） 下：廿子Ⅲ遺跡出土遺物（錢貨）	33
図版7	廿子Ⅲ遺跡出土遺物（磁器）	34

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長690kmの主要幹線道路である。この道路はまた、山陰諸都市間を結ぶ唯一の幹線道路でもあり、経済的活動・文化的活動に重要な役割を果たしている。

しかし、近年の交通量の増加と沿線の市街化の影響により、主に都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生している。このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となっており、その様相は益田市においても例外ではない。さらに益田市は一般国道9号及び191号が市内中心部で交差するという地理的要因もあって交通混雑が慢性的に発生し、都市機能に支障をきたし始めていた。

こうした状況のもと、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するために、平成8年度に建設省（現 国土交通省）により益田道路（延長7.8km、益田市遠田町～須子町）の建設が計画・事業化されることとなった。

この計画・事業化にあたり、建設省から島根県教育委員会に対して、益田道路建設予定地内の遺跡の存否について照会があった。これを受けて、益田市教育委員会の協力のもと、平成10年度に予定地内において遺跡の分布調査が実施されることとなった。分布調査は平成11年2月に実施され、その結果、27ヶ所の遺跡及び遺跡推定地（最終的にはルート上から外れるものを含んでいたため24ヶ所の遺跡及び遺跡推定地）を確認し、建設省に回答した。（第1表）

以後、この結果をもとに建設省と島根県教育委員会との間で協議が適時なされ、予定地内遺跡の埋蔵文化財発掘調査について具体的に検討が行われた。

その結果、平成13年度から予定地内遺跡の現地調査を開始することとなり、工事の先行する益田市高津町・飯田町に所在する遺跡の調査から着手した。

第1表 益田道路建設予定地内遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代	遺跡面積 (m ²)	施行範囲内面積 (m ²)	現状	調査年度	備考
1	流松道路	益田市遠田町	集落跡		34,900	8,600	水田	平成17年度	縦斜面及び平坦地
2	流松南遺跡	益田市遠田町	集落跡		7,600	2,200	山林	平成17年度	尾根上及び縦斜面に平坦部
3	摩川遺跡	益田市遠田町	古墳及び集落跡	古墳～	31,000	18,000	山原・山腹		平坦地・縦斜面 北側に周知の遺跡「尾根古墳群」が確認
4	久城西古道跡	益田市久城町	古墳～	8,200	4,200	山林			尾根上に縦斜面
5	久城西古道跡	益田市久城町			35,400	11,800	山林	H11年夏に平坦化される 尾根上に平坦地 縦斜面	
6	岩瀬台遺跡	益田市久城町			14,500	10,500	山林・畠		
7	久城東遺跡	益田市久城町	近世の石垣集落跡	幕末～	23,900	11,200	宅地・畠・墓地		平坦地
8	城廻跡	益田市久城町	城廻跡	中世～	18,600	3,500	宅地		
9	宮ノ上遺跡	益田市久城町			15,900	12,700	宅地・畠		平坦地
10	道ノ谷古墳群	益田市久城町	古墳（横穴式）城廻	古墳～	11,100	2,100	宅地・山林・畠		平坦地 縦斜面 周知の遺跡 滝恋寺番塚
11	寺光寺跡内遺跡	益田市久城町	古墳跡 城跡 五輪塔	古墳～	9,700	2,800	山林・墓地		平坦地 周知の遺跡 菩提院跡も含む
12	沖手遺跡	益田市中島町	散在地	中世～	86,000	29,700	水田	平成16年度～ 17年度	低高地 周知の遺跡 98年市教委委託時に 記述あり
13	中河原遺跡	益田市中島町	散在地 低湿地遺跡	中世～	184,900	47,100	水田・畠・宅地		
14	浜遺跡	益田市浜吉町	神社跡 散在地	中世～	37,600	14,700	畠・宅地	平成13年度 ～15年度	低湿地 周知の遺跡 平坦地 中庭の神木社付近を含む
15	浜寄・地方遺跡	益田市浜吉町	散在地 集落跡跡	古墳～	118,400	42,200	畠・宅地	平成14年度 ～15年度	低湿地 津前野御番所伝承地を含む
16	冲田遺跡	益田市高津町	散在地	弥生～古墳	45,100	16,400	山林・水田	平成13年度	鉄器・干貝器 周知の遺跡 万葉公園内にサガ り遺跡・研石横穴あり
17	廿子1号跡	益田市飯田町	弥生・古墳	11,200	8,000	山林	平成13年度	尾根上 平坦地 縦斜面	
18	廿子2号跡	益田市飯田町	弥生・古墳	13,800	2,800	山林	平成13年度	マウンド 平坦地	
19	廿子3号跡	益田市飯田町	弥生・古墳	5,800	2,700	山林	平成14年度	尾根上 平坦地	
20	やばら1号跡	益田市飯田町	古墳～近世	8,500	2,400	山林・墓地	平成13年度	平地 古墳状跡地	
21	やばら2号跡	益田市飯田町	古墳・城砦	10,200	3,800	山林	平成13年度	平坦地 古城状跡地	
22	じんだん遺跡	益田市飯田町	古墳	18,000	9,100	山林	平成13年度	平地地 周知の遺跡	
23	想比力1号跡	益田市飯田町	古墳	7,400	3,900	山林	平成13年度	尾根上・縦斜面に古墳状跡地 以上	
24	恵比寿1号跡	益田市飯田町	古墳	8,600	3,800	山林	平成13年度	尾根上及び縦斜面に古墳状跡地 2以上	



第1図 益田道路建設予定地内の溝跡 (S = 1 / 40,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡は、益田市飯田町の白土川左岸に面した低丘陵上に位置している。飯田町は主要地方道益田・阿武線沿いの、白土川と高津川との合流地点から南に広がる中州及びその周辺地域にある町で、現在では果樹栽培や野菜の栽培が盛んに行われている。遺跡の立地する地点からは、高津・白土両河川や周辺に広がるこれらの耕作地を望むことができる。



遺跡周辺の状況（廿子Ⅲ遺跡から）

第2節 地理的環境

(概況) 益田市は島根県の西部、山口県との県境に位置する、人口約53,000人の市である。現在でもJR山陰線と山口線、国道9号線と191号線の分岐点となり、広島・山口へ通じているように、その地理的位置により古くから山口県・広島県との結びつきが強く、民俗・文化や風土の面でも県東部とは異なった様相を見せている。

(地形) 益田市は北部の平野部（益田平野）とそれを取り囲むようにある周辺の丘陵部・山間部からなっている。益田平野は美都・匹見町境の春日山に源を発して北流する益田川と、六日市町（現吉賀町）に源を発し、支流の津和野川・匹見川を合わせて北流する高津川の作用によって形成された複合三角州であり、石見部最大の規模を誇る。これまでの研究によれば、約6,000年前までは「古益田湖」と称される湖が広がっていたものが、両河川による堆積作用の結果徐々に陸化していったと考えられている。平野の東側と南側は丘陵部で、中国山脈から伸びる支脈の先端



第2図 遺跡の位置

部にあたり、東側の丘陵を開削している沖田川・津田川・遠田川の周辺には小規模な氾濫源や河岸段丘が見られる。また平野の北西側は海岸の砂が季節風によって吹き上げられ浜堤を形成するなど、変化に富んだ地形となっている。

第3節 歴史的環境

旧石器時代

今までのところ旧石器時代に関する遺跡や遺物は確認されていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、安富王子台遺跡、三宅御土居跡、土居後遺跡など数カ所で確認されている。安富王子台遺跡は高津川下流域にあり、縄文後期から晩期にかけての土器や石器など多くの遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、安富王子台遺跡、羽場遺跡、井元遺跡、松ヶ丘遺跡、サガリ遺跡など十数か所が知られている。縄文時代の遺跡の数と比べかなり増加しており、人々がこの地に広く住み始めたことを窺わせている。本格的に調査が行われた遺跡は少ないが、安富王子台遺跡の北側に位置する羽場遺跡からは、長さ50mにも及ぶV字形の大型の溝（環濠）が確認されている。遺構内からは突帯文や櫛描文など装飾に富んだ中期の土器も大量に出土しており、規模の大きな集落が存在したと考えられている。

古墳時代

古墳時代に入るとさらに遺跡数も増加する。古墳は石見部の中では最も多く築かれていると考えられ、大型古墳も早い時期から作られている。主要なものとしては、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳（前期）、全長89mを測り前期では県内最大規模の大元1号墳（前期）、埴輪列や葺石を伴い、二段築成の墳丘をもつスクモ塚古墳（中期）、墳丘長52mで周囲に周濠と外堤を持ち、馬具等も出土した小丸山古墳（後期）、50基以上の古墳で構成された鶴ノ鼻古墳群（後期）などがある。横穴墓も多く造られており、北長迫・南長迫両横穴墓群ではあわせて50基近くが確認されている。

これらの古墳は、市内南西部にある横穴式石室をもった白上古墳を除けば、基本的に益田平野の東から南にかけての丘陵に築かれており、現状では東半分に偏在する傾向にある。しかし近年、高津川左岸地域においても一基のみではあるが横穴墓が確認されていることから、市内西側においても存在する可能性が考えられるようになってきている。こうした古墳の建造と不可分の関係をもつ集落については、これまでのところほどんど明らかになっていないが、それ以外のものとしては、市内北東部で後期の須恵器窯が数基確認されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、大溢遺跡、庄屋東遺跡、サガリ遺跡、石塔寺権現経塚などが知られているが、数は少ない。大溢遺跡は日本海に面した丘陵にある遺跡で、建物跡のほか製塙土器や須恵器がまとまって出土している。また右塔寺権現経塚からは中国製褐釉四耳壺を含む優品が出土している。

鎌倉・室町時代

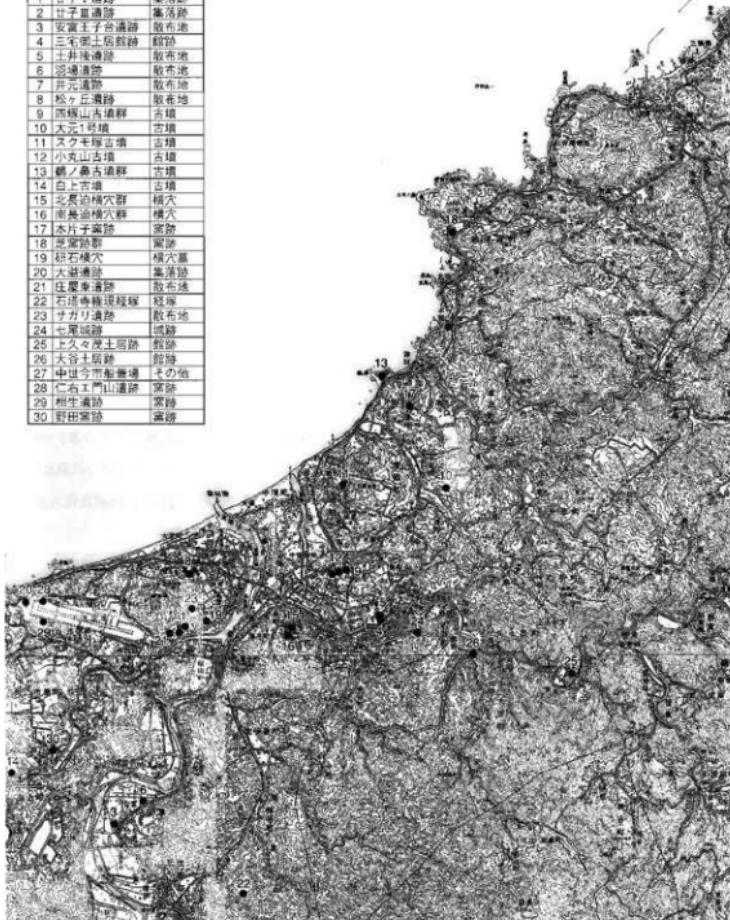
鎌倉・室町時代の遺跡は、七尾城跡、三宅御土居跡、中世今市船着場跡などこの時代に活躍した益田氏と関わるものをを中心に多く知られている。七尾城跡は益田平野の南東の丘陵に位置し、本丸跡や二の段の主郭部分を中心に曲輪や土壘等の防御施設を持ち、戦国時代の前期の山城として稀にみる整った構えを残している。瓦や土師質土器のほか、貿易陶磁器や人目茶碗など多種多様な遺物も多量に出土している。三宅御土居跡は、七尾城跡から東へ約700mの距離にあり、益田川の対岸に位置している。堀と大規模な土壁で守られた東西約185mに及ぶ戦国期の地方豪族の屋敷跡で、多様な遺物も出土しており、益田氏の強い軍事力・経済力が窺える。このほか大谷土居跡や上久々茂土居跡など、城館跡だけでも50か所近くが残っている。

市内には、雪舟作の庭園をもつ医光寺・万福寺、益田氏の菩提寺である妙義寺など、多くの社寺なども存在し、全体として中世に関連した史跡の割合が高い。

江戸時代以降

江戸時代以降の遺跡としては、仁右エ門山遺跡や相生遺跡など、瓦や日常雑品などを焼いた石見焼窯跡が認められる。また磁器を焼いた白上焼の窯跡も知られている。

	遺跡名	種別
1	廿子工遺跡	集落跡
2	廿子里遺跡	集落跡
3	安富王子台遺跡	散布地
4	三宅御土居遺跡	散布地
5	土井後遺跡	散布地
6	沢邊遺跡	散布地
7	井元遺跡	散布地
8	松ヶ丘遺跡	散布地
9	西橋山古墳群	古墳
10	大元ノ野墳	古墳
11	スクモ塙古墳	古墳
12	小丸山古墳	古墳
13	鶴ノ森古墳群	古墳
14	白上古墳	古墳
15	北長治横穴群	横穴
16	南長治横穴群	横穴
17	木片子廻跡	廻跡
18	足富跡群	廻跡
19	細石横穴	横穴墓
20	大溝遺跡	集落跡
21	庄屋幸清跡	散布地
22	石垣城跡復元跡	城壁
23	ナガリ遺跡	散布地
24	千尾城跡	城跡
25	久々茂土居跡	聚落
26	大谷土居跡	聚落
27	中世今市船着場	その他
28	仁右エ門山遺跡	実跡
29	相生遺跡	実跡
30	野田遺跡	遺跡



第3図 周辺の主な遺跡 (S = 1 / 100,000)

註

- (1) 林 正久「益田平野の古地理の変遷」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会 2000

(主要参考文献)

- 矢富熊一郎『益田市史』
益田市誌編纂委員会『益田市誌』上巻
益田市教育委員会『安富王子台遺跡発掘調査概報』1981
益田市教育委員会『鶴ノ鼻古墳群発掘調査概報』1984
益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅰ』1986
益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅱ』1987
益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅲ』1988
益田市教育委員会『小丸山古墳発掘調査報告書』1990
益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅰ』1991
益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅰ—勝連寺・七尾城跡—』1993
益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅱ』1994
益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群Ⅲ』1995
益田市教育委員会『益田堤点工渠用地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1996
益田市教育委員会『七尾城跡・三宅御土居跡—益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』1998
益田市教育委員会『中世今市船着場跡文化財調査報告書』2000
益田市教育委員会『身近なまちづくり支援街路事業 歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う
　　曉音寺発掘調査概要報告書』2001
益田市教育委員会『自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う 浜寄遺跡発掘調査報告書』2002
益田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ（七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査）』2003
益田市教育委員会『中小路遺跡—平成15年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書』2004
益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅱ』1992
島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』1992
島根県教育委員会『上久々茂土居跡・大峰遺跡』1994

第3章 調査の経過

平成13年度

平成13年度は、基本的に確認調査を行い、一部で本調査を実施した。対象は浜遺跡・沖田遺跡・やばらⅠ遺跡・やばらⅡ遺跡・じんだ遺跡・恵比寿Ⅰ遺跡・恵比寿Ⅱ遺跡・廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅱ遺跡・廿子Ⅲ遺跡で、5月から翌年1月までの期間で実施した。

第2表 調査工程表

遺跡名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
浜遺跡		■				■							H13.5/14～5/22 8/21
沖田遺跡			■						■				H13.5/29～5/31 12/26～12/27
やばらⅠ遺跡					■								H13.8/28～9/13
やばらⅡ遺跡			■	■	■								H13.6/12～9/10
じんだ遺跡			■	■	■								H13.7/3～8/28
恵比寿Ⅰ遺跡				■	■	■							H13.9/10～10/23
恵比寿Ⅱ遺跡				■	■	■							H13.8/23～10/19
廿子Ⅰ遺跡							■	■	■	■			H13.10/19～H14.1/18
廿子Ⅱ遺跡								■	■				H13.10/24～11/29
廿子Ⅲ遺跡								■	■				H13.10/24～11/22

(浜遺跡)

浜遺跡は5月14日から調査を開始した。前年度にも確認調査を行っているが、それに加えて8本のトレンチを設定した。しかし、砂が厚く堆積していて遺構・遺物とも検出できなかったため同月22日に調査を終了した。



浜遺跡 人麻呂・碑

(沖田遺跡)

沖田遺跡は5月29日から31日までと、同年12月26・27日に調査を実施した。前期調査で6本・後期で11本のトレンチを設定したが、須恵器片等が若干確認されたものの顕著な遺構・遺物は確認されず、調査を終了した。

(じんだ遺跡)

じんだ遺跡は7月5日から調査を開始した。46本のトレンチを設定したが一部のトレンチから須恵器片が出土したにとどまり、顕著な遺構・遺物は確認されなかったため、8月28日に調査を終了した。



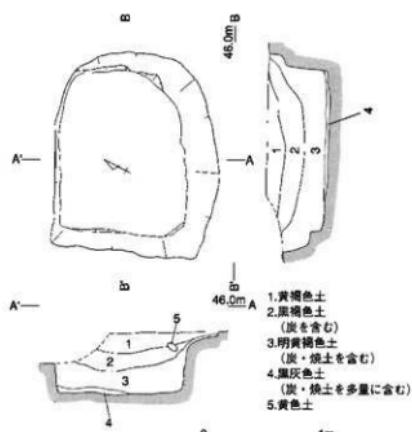
やばらⅡ遺跡（南東から）

(やばらⅡ遺跡)

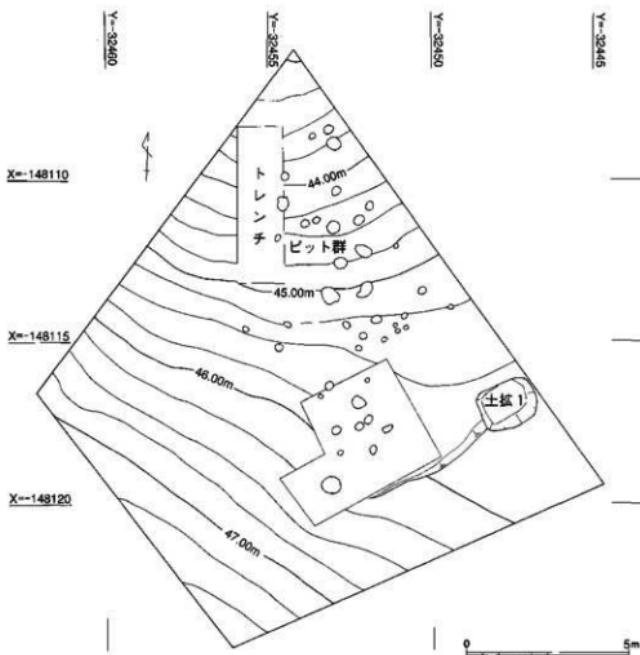
やばらⅡ遺跡は6月12日から27本のトレンチを設定して調査を行った。これらのうち一部のトレンチからは土坑やピット、磨製石斧などが

確認された。このうち、ピットの確認されたトレンチ周辺を中心に8月29日より範囲を広げて調査を実施したところ、土坑1基とピット群が検出された。土坑は、平面形が長方形で長さ約1.2m、幅約1m、深さ約40cmを測るもので、炭化物を多く含んだ土が堆積し壁面が焼けている部分もあった。

ピット群は谷部中央付近でまとまって確認されたが、建物跡等を想定するには至らず、また遺物の出土もなかったことから調査を終了した。



第4図 やばらⅡ遺跡土坑1実測図
(S = 1 / 40)



第5図 やばらⅡ遺跡構造配置図 (S = 1 / 150)

(やばらⅠ遺跡)

やばらⅠ遺跡は8月28日より調査を開始した。8本のトレンチを設定したが、遺構・遺物とも確認されなかったため、9月13日に終了した。

(恵比寿Ⅰ・Ⅱ遺跡)

恵比寿Ⅰ遺跡・恵比寿Ⅱ遺跡は、ともに9月13日から調査を開始した。恵比寿Ⅰ遺跡には20本のトレンチを、恵比寿Ⅱ遺跡には29本のトレンチを設定した。

その結果、後者で土坑2基及び須恵器片を確認した。土坑は平面形が長方形状のものと不整形なもので、両者とも炭化物を多く含む土が堆積し壁面が焼けている部分があった。なお、須恵器蓋と考えられる破片が埋土中より出土した。

しかしながらこのほかに顕著な遺構・遺物は確認されなかったため、10月23日に両遺跡とも調査を終了した。

(甘子Ⅱ・Ⅲ遺跡)

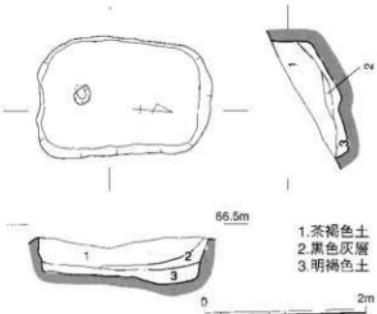
甘子Ⅱ遺跡・甘子Ⅲ遺跡は10月24日から調査を開始した。甘子Ⅱ遺跡には19本のトレンチを設定したもの、土坑一基を検出した以外、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。一方の甘子Ⅲ遺跡では19本のトレンチを設定し確認したところ、土坑や弥生土器等が検出された。その状況からさらに広がる可能性があると判断したため、甘子Ⅲ遺跡については翌14年度に本調査を行うこととし、11月19日に両遺跡の調査を終了した。

(甘子Ⅰ遺跡)

甘子Ⅰ遺跡は10月19日から調査に入り、35本のトレンチを設定したところ、丘陵先端部で落ち込みを発見したので、その付近を中心に本調査に移行した。その結果、落ち込み部分が建物跡であることを確認し、翌年1月18日にラジコンヘリによる空撮を実施して全ての調査を終了した。



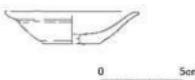
第6図 恵比寿Ⅱ遺跡出土遺物実測図
(S=1/3)



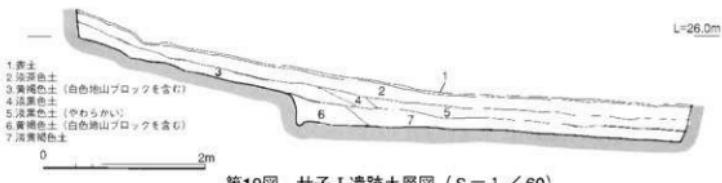
第7図 恵比寿Ⅱ遺跡(T22) 土拵実測図
(S=1/60)



第8図 甘子Ⅱ遺跡(T2) 土拵実測図
(S=1/80)



第9図 甘子Ⅰ遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)



第10図 廿子Ⅰ遺跡土層図 ($S = 1/60$)

平成14年度

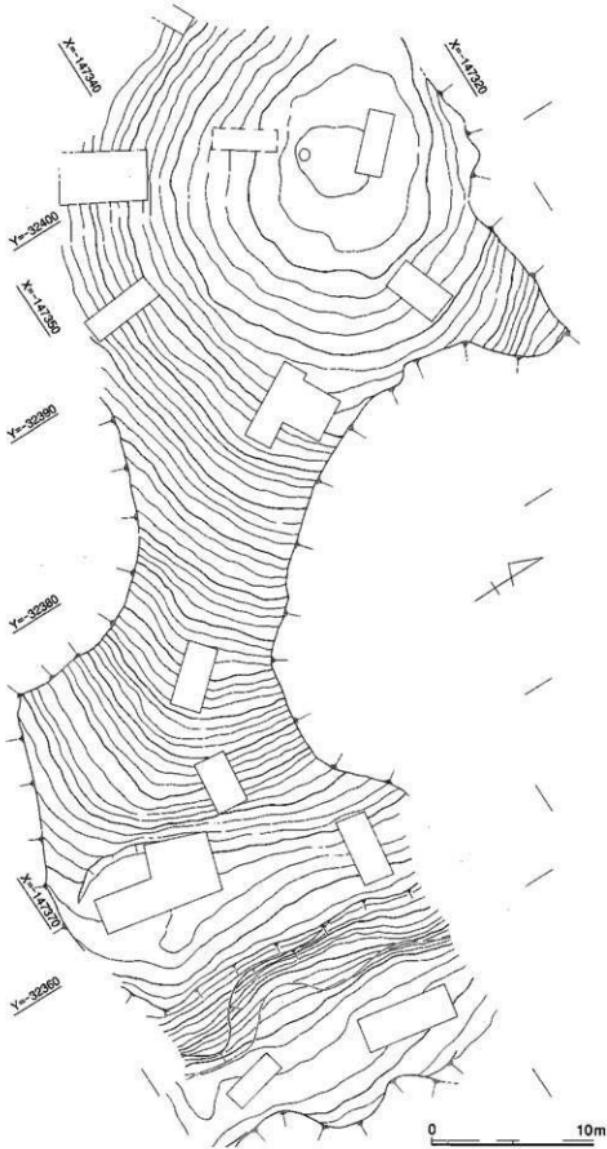
平成14年度は、5月7日から廿子Ⅲ遺跡の本調査を行った。調査区内の最頂部（標高約30m）より作業を始め、10台のベルトコンベアを投入して全面的に表土を剥ぎ取りつつ、地山面まで掘り下げていった。これと並行して地形測量も実施した。また、土砂流出防止等の安全対策を考慮して仮設防護柵を設置した。

遺跡の最頂部から中ほどまでは頗るな遺構・遺物は検出されなかったが、標高約15m付近において弥生土器・須恵器・磁器などの遺物と、直径7m程度の建物跡2棟が確認された。調査最終日の6月27日にはラジコンヘリによる空撮を実施して、全ての調査を終了した。

なお、調査期間中には益田市立西南中学校の生徒が総合学習のため、遺跡の見学に訪れた。



廿子Ⅲ遺跡調査状況



第11図 廿子Ⅲ遺跡調査前地形測量図・トレンチ位置図



第12図 廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡調査区位置図

第4章 廿子I遺跡

第1節 調査の概要

廿子I遺跡は益田市飯田町に位置する遺跡である。遺跡は、高津川の支流白上川の左岸にある低丘陵の、南方に向かって延びる尾根筋の先端付近、標高約20~35mのところ（丘陵下にある水田面からの比高はおよそ15~20m）に立地している。調査前の状況は山林で、尾根先端部から下方の水田面にかけては戦後耕作されたと考えられる畾の痕跡が残っていた。また数ヶ所では地滑りの跡も確認された。

調査は、およその遺跡の範囲を確認するための確認調査から開始することとし、前述の地形変化が認められる場所以外にトレンチを設定した。その結果、ほとんどのトレンチからは顯著な遺構・遺物とも確認されなかったが、尾根先端部に設置したものから遺構を確認し、その部分を中心に調査を行った。

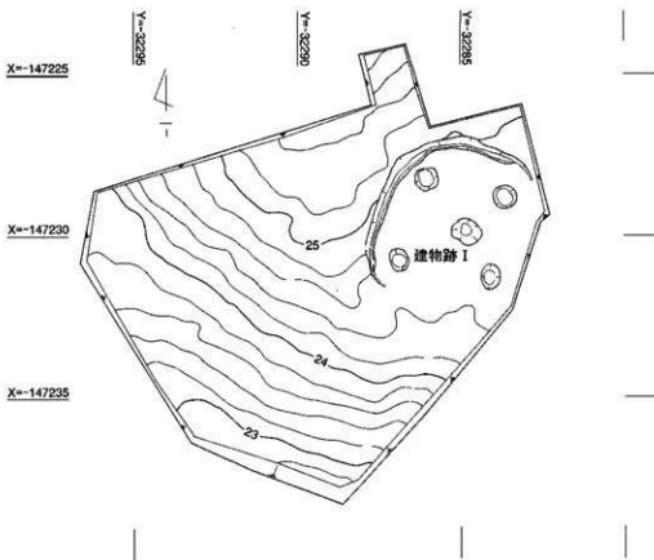
第2節 調査の結果

調査の結果、建物跡1棟と若干の遺物を確認した。概要是以下のとおりである。

建物跡（第14図）

尾根の先端部、標高が床面で計測して約24.5mのところに立地する、竪穴の建物跡である。南東側半分近くが流出しているため全容は明らかでないが、残存部分から判断して平面形が隅丸方形に近い形を呈し、規模が南北方向で約5mを測るものと考えられる。（なお、壁は調査段階で最大約50cmの高さを測る。）

建物内床面では、壁際に幅10cm程度の溝が確認されたほか、ピットが5基確認された。このうち



第13図 廿子I遺跡遺構配置図 (S=1/150)

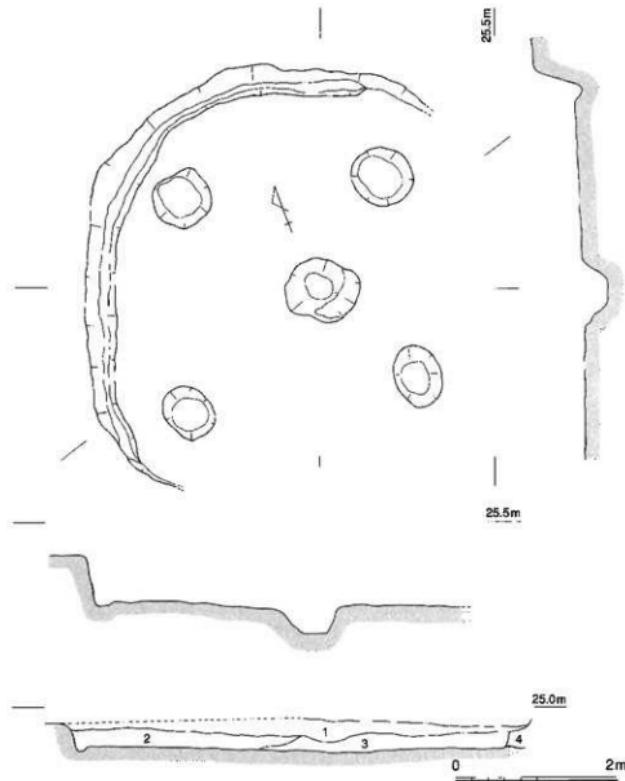
柱穴に相当するのは床面中央のものを除く4基と考えられ、4本柱の建物であったと想定される。また、主に床面南西側を中心に多量の炭と焼土塊が検出された。

遺物は土器等がわずかに確認される程度であった。土器は小片である上に風化が著しく、時期判断の可能なものは出土していない。

第3節 まとめ

廿子I遺跡における調査では建物跡1棟を確認した。時期については、判断の可能な遺物が出土していないため明らかでないが、これまでの調査例や周辺の遺跡の概要等から考えて、弥生時代後期頃のものである可能性が考えられる。

第1節においてもふれたが、尾根先端付近は後世に地形変更が行われたようで、地形の様子から本来はもう少し南に向かって緩斜面が広がっていたことが推測される。従ってほかにも遺構が存在したもの、変更の際に失われていることも考えられる。ただ仮にそうであるとしても、多くの遺構が存在したとは考えにくく、この地域に存在した集落を構成する建物のうちの一つと捉えておきたい。



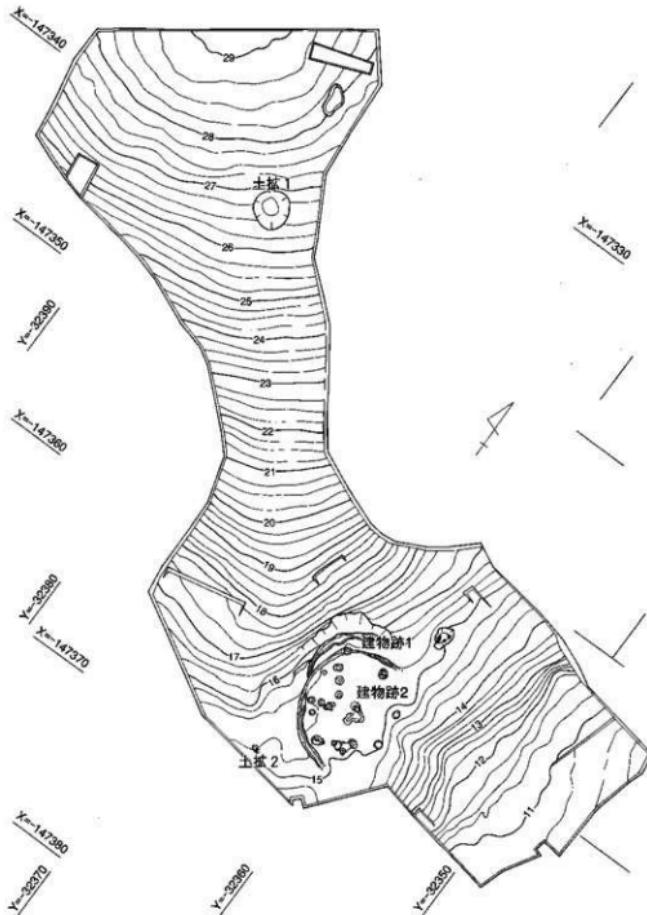
第14図 建物跡実測図 ($S = 1 / 60$)

第5章 廿子Ⅲ遺跡

第1節 調査の概要

廿子Ⅲ遺跡は益田市飯田町に位置する遺跡である。遺跡は、高津川の支流白上川の左岸にある低丘陵の南側斜面、標高15~25m付近に展開している。廿子Ⅰ遺跡からは南西に約100mの地点にあり、調査前は山林であった。

調査は、前年度の確認調査の結果をもとに丘陵頂上部から斜面中腹にかけての部分、約1,000m²について行った。基本的な層序は、表十一黄色系土—地山である。



第15図 廿子Ⅲ遺跡遺構配置図 (S = 1 / 300)

第2節 調査の結果

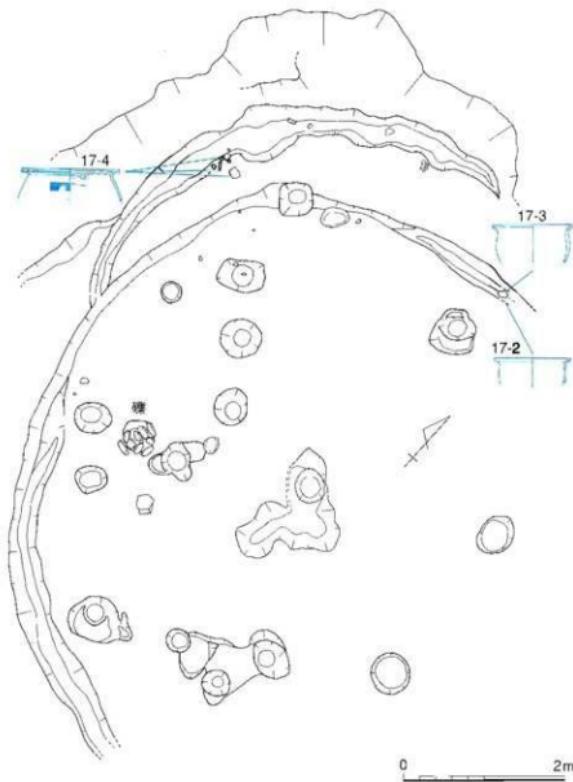
調査の結果、弥生時代と推定される建物跡のほかに土坑などの遺構、弥生時代～近世にかけての遺物等を確認した。

建物跡（建物跡1・建物跡2）（第16・19図）

建物跡は2棟が確認された。2棟とも標高15m付近の、丘陵斜面を削って造り出された平坦面上に立地する竪穴の建物跡で、切り合う位置関係にある。確認調査時に建物跡1とした部分を掘り下げているため切り合い関係があまりはっきりしないが、ピットの状況等からは建物跡2→建物跡1の順が考えられる。

建物跡1

建物跡1は半分以上が失われており、確認されたのは北西側の一部である。残存部から推測して平面形が円形で、径が約6mの建物跡と考えられる。建物内床面では、壁際に幅約10～20cmの溝が廻らされているほか、柱穴に相当すると考えられるピットが一基確認された。確実に伴うと判断できるものはほかに確認されていないので、柱数については明らかでない。ただし後述する建物跡2の床面で確認されたピットの中にも、建物跡1に伴うピットが存在するものと考えられる。



第16図 建物跡1・2遺物出土状況図 ($S=1/60$)

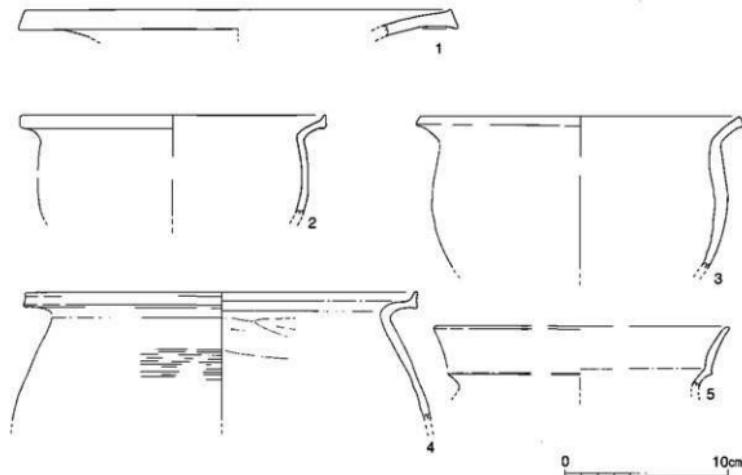
建物跡2

建物跡2は東側が流出しているものの、比較的良好な状態で確認された。残存部分から判断して、平面形が円形で径が約7mのものと考えられる。建物内床面では、壁際で一部溝が確認されたほかピットが多数確認された。確認された溝は幅約10~20cmを測るが、途中で途切れており全周はしていない。ピットは位置関係や底面の高さ等から判断して、基本的に6基が柱穴に相当するものと考えられる。また、床面中央では不整形な形状をしたピットが確認されたが、焼土や木炭等は認められず、がとして機能したかどうかは明らかでない。

これらの建物では、わずかではあるが遺物も出土している。建物跡ごとの取り上げを行ってはいるものの、いずれも床面よりもやや上位での出土であり、厳密に分けることは難しいので、一括して記載することとした。

1は壺の口縁部と考えられるものである。残存状況が悪く口径等は推測による。2~5は甕である。2は口縁部が「く」の字状に曲がり、端部にわずかな面を有している。3も口縁部が「く」の字状に曲がるもので、端部には平坦面が認められる。4は口縁端部が上方に拡張され、平坦面を持つ。器表面の状態がよくないため調整等明らかでない部分が多いが、外面には横向方向のハケメが一部見られる。5は複合口縁の甕である。口縁部は外反し、器壁は薄い。

このほか、どちらの建物跡に伴うものか判断できなかったが、礫がまとまった状態で確認されている。礫は基本的に長椭円形をしており、長さが約10cmのものが1点あるほかは15~18cm程度のものである。用途については明らかにできなかった。

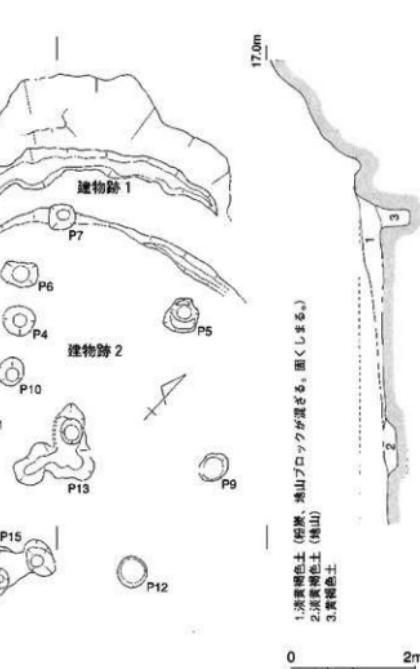
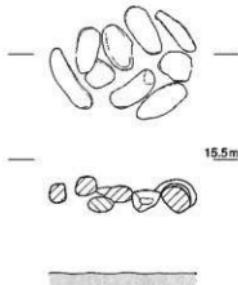


第17図 建物跡1・2出土遺物実測図 (S=1/3)

第3表 建物跡出土磚計測表

番号	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
1	17.0	8.1	1,190.61	
2	16.2	7.8	1,348.86	
3	10.8	10.1	1,010.13	
4	14.9	9.2	1,193.75	
5	18.5	7.1	1,181.11	
6	14.8	7.9	997.74	
7	16.4	8.7	1,343.78	
8	18.5	9.5	1,393.78	
9	17.4	8.8	1,206.06	

第18図 建物跡内出土状況図
(S = 1 / 15)



第19図 建物跡1・2実測図 (S = 1 / 80)

土坑1（第20図）

土坑1は標高26.5m地点に立地している。平面形はほぼ円形で径約2m、深さが約1.8mと大型のものである。上坑内には粉炭を含む土が堆積しており、上面では木炭・焼土も確認されたが、遺物は確認されておらず、時期や性格については明らかでない。

土坑2（第21図）

建物跡の南側約3mのところにある。平面形は楕円形状で、深さはほとんどない。炭化物を多量に含む土が堆積し、壁面では被熱によると考えられる変色部分が認められた。出土遺物等ではなく、時期については明らかでない。

土坑3（第22図）

建物跡の北側約2mのところにある。平面形は不整形な形状で、深さはほとんどない。炭化物を含む土が堆積していた。出土遺物等ではなく、時期については明らかでない。

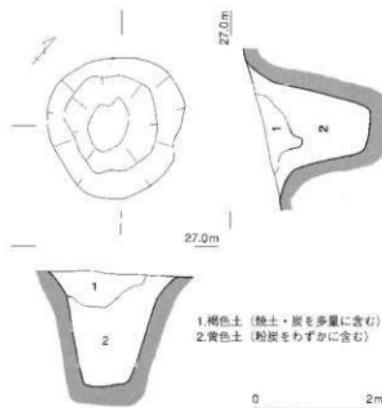
出土遺物（第23～26図）

遺物は弥生土器、須恵器、上師器、陶器、磁器などが出土したが、いずれも出土点数は多くない。

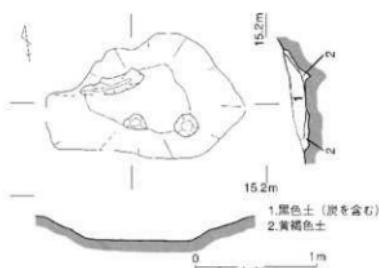
弥生土器は壺や甌が出土した。ほとんどが小片なうえ器表面が風化しており、詳細については明らかでないが、23-1のように口縁部がやや肥厚し山口方面の影響を感じさせるようなものも見られる。

須恵器は蓋や環が出土した。蓋はボタン状や珠球状、輪状のつまみを持つものがある。环は23-13のように高台が付き体部が直線的に開いて、深いものが見られる。

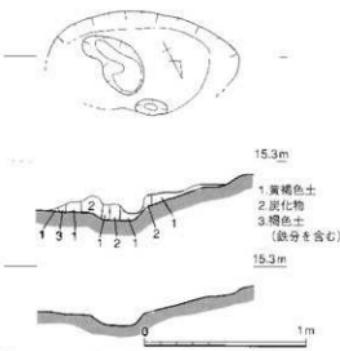
上師器は環や皿が出土した。いずれも糸切り底である。中には23-14・15のように煤が口縁部に付着しているものも見られる。



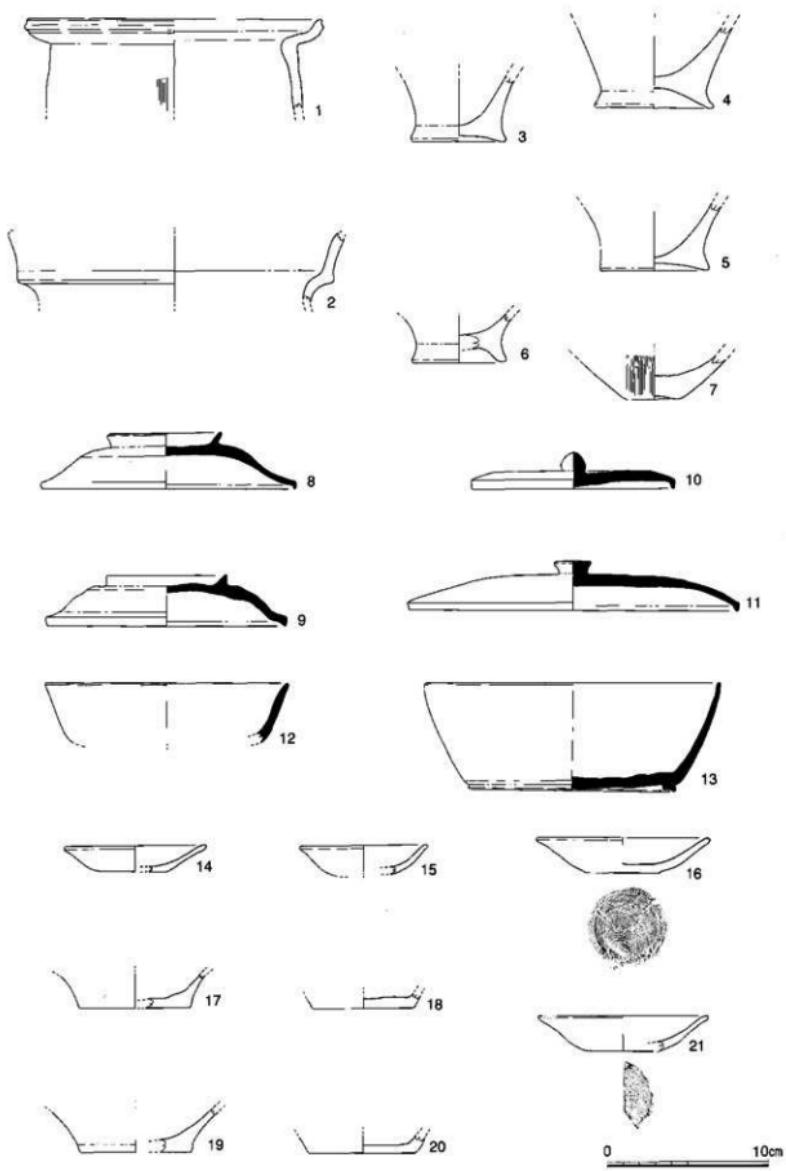
第20図 土坑1実測図 ($S = 1/80$)



第21図 土坑2実測図 ($S = 1/40$)



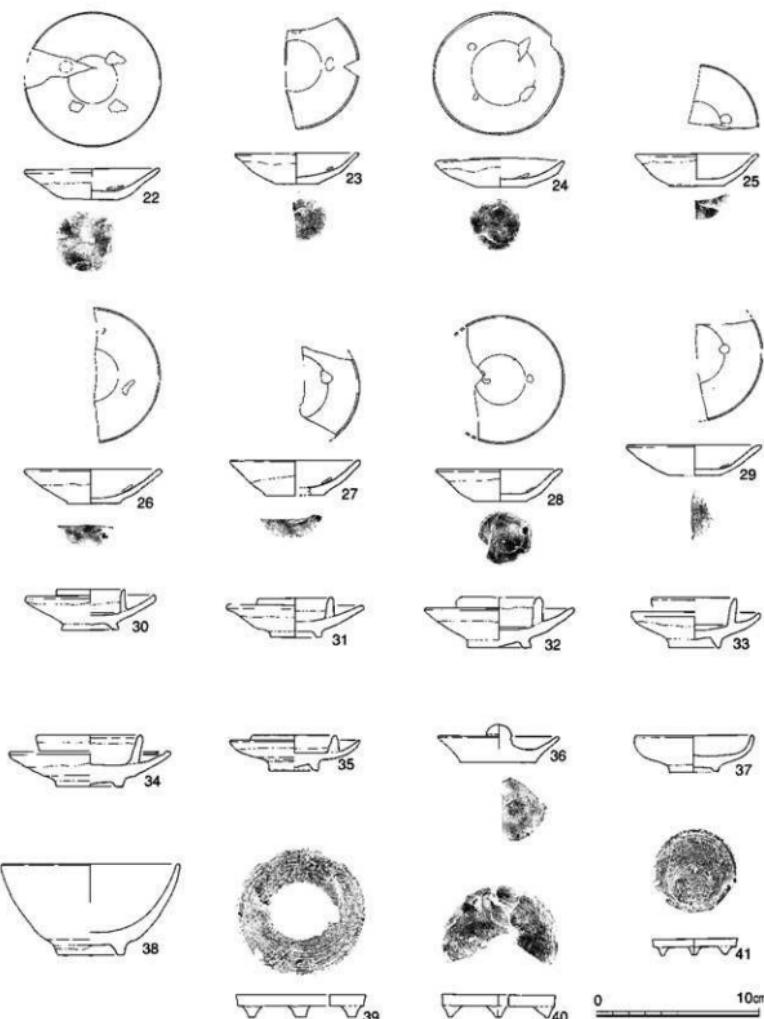
第22図 土坑3実測図 ($S = 1/30$)



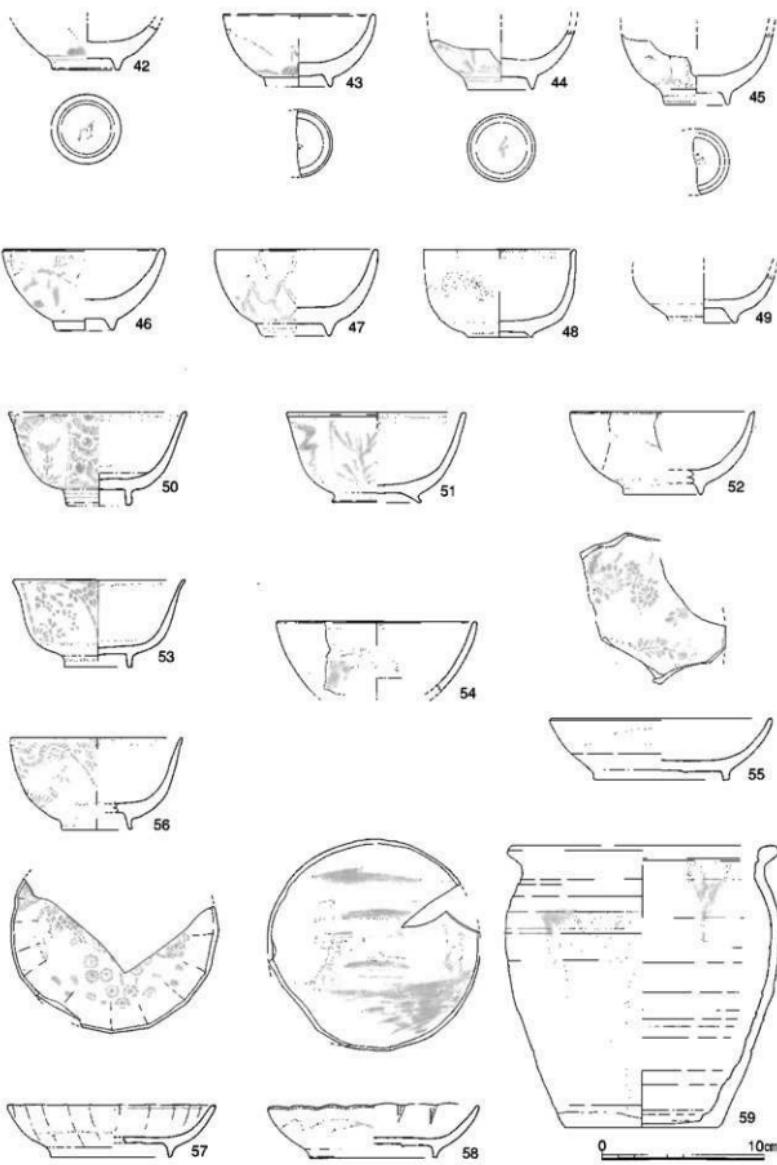
第23図 廿子Ⅲ遺跡出土遺物実測図(1) (S = 1 / 3)

陶器は碗・皿・壺のほか灯明具が出土した。灯明具は削り出し高台の付いた皿に輪状の受け部を貼り付けたもので、灰白色の釉がかけられている。

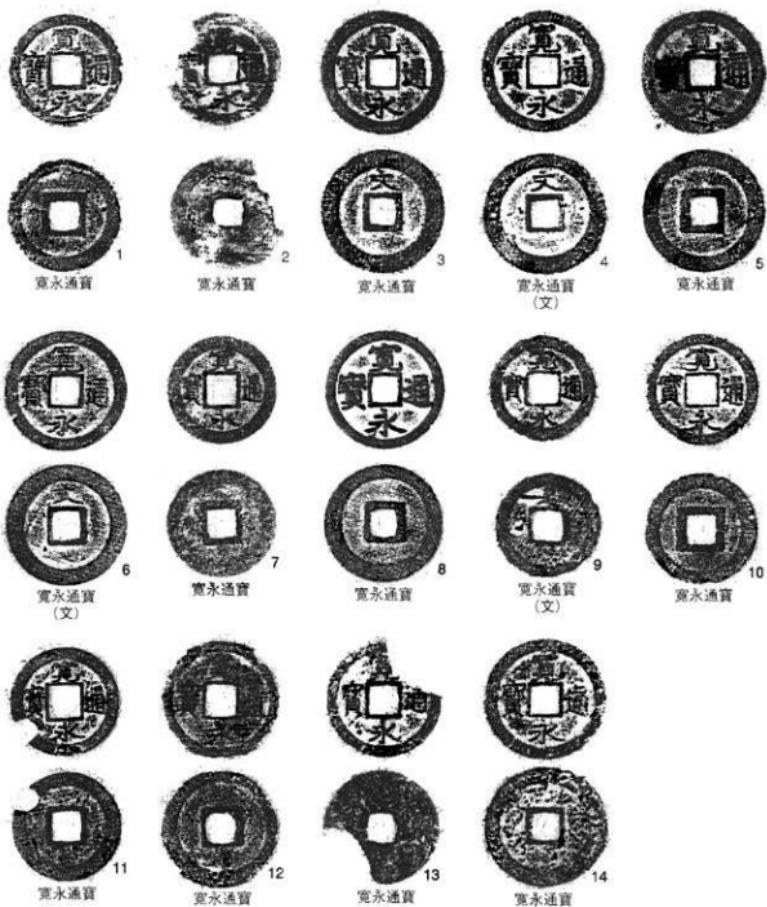
磁器は碗や皿が出土している。肥前系の磁器のほかに、益田でかつて生産された白上焼も見られる。



第24図 廿子Ⅲ遺跡出土遺物実測図(2) (S = 1 / 3)



第25図 廿子Ⅲ遺跡出土遺物実測図(3) (S = 1 / 3)



第26図 廿子Ⅲ遺跡出土銭貨拓本 (S = 1 / 1)

第4表 出土銭貨計測表

編目番号	回版番号	出土地点	単位	名稱	銘徑(A)/銘徑(B)(mm)	銘徑(C)/銘徑(D)(mm)	銘厚(mm)	重目(g)	備考
26-1	6	B6	1層	寛永通寶	23.25/23.35	19.35/19.20	1.00~1.20	2.04	
26-2	6	B6	1層	寛永通寶	23.10/	18.90/	1.60~2.60	2.85	
26-3	6	B6	1層	寛永通寶	25.70/25.60	20.60/20.30	1.45~1.60	3.63	(文)
26-4	6	B6	1層	寛永通寶	25.25/25.35	20.50/20.15	1.30~1.45	2.61	(文)
26-5	6	C6	1層	寛永通寶	25.35/25.20	20.25/20.05	1.20~1.30	3.18	
26-6	6	TR18		寛永通寶	25.00/25.15	20.00/19.70	1.15~1.20	2.94	(文)
26-7	6	TR18		寛永通寶	22.55/22.50	17.30/17.05	1.10~1.25	1.95	
26-8	6	A6	1層	寛永通寶	24.40/24.40	20.80/20.25	0.90~1.00	2.46	
26-9	6	TR15		寛永通寶	22.00/22.00	16.70/16.80	0.75~1.00	1.71	(文)
26-10	6	B6	1層	寛永通寶	23.10/23.10	18.60/18.60	1.00~1.15	2.16	
26-11	6	A6	1層	寛永通寶	22.60/22.50	17.40/17.30	0.90~1.10	1.77	
26-12	6	A6	1層	寛永通寶	24.35/24.30	20.25/20.00	1.00~1.20	2.54	
26-13	6	B5 P-22	1層	寛永通寶	23.65/23.35	19.10/18.90	1.30~1.45	1.87	
26-14	6	C6	1層	寛永通寶	25.25/25.15	19.80/20.10	1.50~1.60	2.98	

第5表 建物跡出土遺物観察表

調査区分	出土位置	地盤区分	種別	種類	遺物			備考
					上	中	下	
17-1	5	建物跡	弥生土器	壺				外縁：(表面磨耗により)剥離不規則 内縁：(表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色
17-2	5	建物跡 2	弥生土器	壺				外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：(表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色
17-3	5	建物跡 2	P-40	弥生土器	壺	(19.7cm)		外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：(表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色
17-4	5	建物跡 1	H-31	弥生土器	壺	(23.8cm)		外縁：コネティック・ハマメ (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ヘマタイト 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色
17-5	5	建物跡 1	粘土	弥生土器	壺			外縁：コネティック 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色

第6表 出土遺物観察表（弥生土器・土師器・須恵器）

調査区分	出土位置	地盤区分	種別	種類	遺物			備考
					上	中	下	
23-1	5	T15	弥生土器	壺				外縁：コネティック・ハマメ 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色
23-2	5	TR15	弥生土器	壺				外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む やや黄 淡褐色
23-3	5	S	1層 (P-20)	弥生土器	(底部)	(6.0cm)		外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む 良好 非褐色
23-4	5	T15	弥生土器	壺		7.4cm		外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色 上げ延
23-5	5	B5	1層 (P-22)	弥生土器	(底?)	6.6cm		外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色 若干上げ延
23-6	5	A6	1層	弥生土器	(底?)			外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色 上げ延
23-7	5	C5	1層	弥生土器	(底?)	3.1cm		外縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 内縁：ナチュラル (表面磨耗により)剥離不規則 小石を含む 良好 淡褐色
23-8			1層	須恵器	壺	16.0cm	3.3cm	外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-9			1層	須恵器	壺	(16.0cm)	(3.5cm)	外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-10		A6	1層	須恵器	壺	(12.5cm)	2.2cm	外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-11		A5	1層	須恵器	壺	(12.0cm)		外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-12	6		1層	須恵器	壺	20.0cm	3.0cm	外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-13	6		1層	須恵器	壺	16.0cm	4.5cm	外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-14		B6	1層	須恵器	壺			外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-15				III		(7.0cm)		外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-16		A6	1層 (底?)	須恵器	壺	16.0cm	4.5cm	外縁：四角ナチュラル・底あり 内縁：四角ナチュラル・底あり 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-17		A6	1層	土師器	壺			外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-18		A6	1層	土師器	壺?			外縁：ナチュラル・底あり 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-19		A6	1層	土師器	壺			外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-20		A6	1層	土師器	壺?			外縁：四角ナチュラル 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色
23-21		A6	1層 (底?)	須恵器	壺	(10.4cm)	(2.5cm)	外縁：四角ナチュラル・底あり 内縁：四角ナチュラル 1~2mmの砂粒を含む 良好 淡褐色

第7表 出土遺物観察表（陶器・磁器）

調査区分	出土位置	地盤区分	種別	種類	遺物			備考	
					上	中	下		
24-22	6	B5	1層	陶器	壺(打明?)	8.0cm	1.7~2.0cm	3.4cm	
24-23				陶器	壺(打明?)	7.2cm	1.9cm	2.7cm	
24-24	6	A6	1層	陶器	壺(打明?)	7.5~8.0cm	1.6~1.8cm	3.1cm	
24-25		C5		陶器	壺	7.4cm	2.0cm	3.4cm	
24-26		TR15		陶器	壺(打明?)	8.2cm	2.1cm	3.8cm	
24-27		A6	1層	陶器	壺(打明?)	7.8cm	2.0cm	3.6cm	
24-28		B5	1層	陶器	壺(打明?)	7.5cm	2.0cm	3.8cm	
24-29		A6	1層	陶器	壺(打明?)	8.1cm	1.9cm	3.0cm	
24-30	6	A6	1層	陶器	打明具	8.1cm	2.0cm	3.6cm	
24-31	6	B5	1層	陶器	打明具	7.4cm	2.0cm	3.1cm	
24-32	6	C5	1層	陶器	打明具	7.1cm	2.0cm	3.8cm	
24-33				陶器	打明具	7.5cm	2.0cm	3.0cm	
24-34		TR15		陶器	打明具	12.4cm	3.1cm	4.1cm	
24-35		A6	1層	陶器	打明具	12.5cm	2.2cm	2.9cm	
24-36		TR17		陶器	壺?	7.2cm	2.3cm	4.6cm	
24-37		T-15		陶器	壺	7.8cm	2.2cm	3.0cm	
24-38		T-15		陶器	壺	10.7cm	5.5cm	4.0cm	
24-39		TR17		陶器	壺	7.8cm	2.0cm	3.0cm	
24-40		A6	1層	陶器	壺	6.9cm			
24-41		A6	1層	陶器	壺	6.2cm			
25-42		A6	1層	粗陶	壺			4.6cm	
25-43		A5	1層	粗陶	壺	9.1cm		4.0cm	
25-44		A5		粗陶	壺			4.0cm	
25-45				粗陶	壺			4.0cm	
25-46		A6	1層	粗陶	壺	9.5cm	5.0cm	3.5cm	
25-47		A6	1層	粗陶	壺	9.8cm	5.3cm	4.0cm	
25-48				粗陶	壺	9.3cm	5.4cm	4.0cm	
25-49		B6	1層	粗陶	壺			4.0cm	
25-50				粗陶	壺	11.0cm	5.8cm	4.0cm	
25-51		A6	1層	粗陶	壺	11.0cm	5.6cm	5.4cm	
25-52		A6	1層	粗陶	壺	11.2cm	5.1cm	4.0cm	
25-53		A	1層	粗陶	壺	10.6cm	5.4cm	4.0cm	
25-54		A6		粗陶	壺	12.1cm			
25-55		T-16		粗陶	壺	13.6cm	3.6cm	8.2cm	
25-56		A6	1層	粗陶	壺	(10.0cm)	5.7cm	(4.4cm)	
25-57	7	A6	1層	粗陶	壺	(12.8cm)	3.2cm	(7.4cm)	
25-58	7	A6	1層	粗陶	壺	12.8cm	3.2cm	7.7cm	
25-59		TR15	陶器	壺		16.3cm	3.7cm	9.5cm	

第3節 まとめ

廿子Ⅲ遺跡における調査では、建物跡2棟のほか弥生時代～近世に至る遺物を確認した。以下、若干の考察を行いたい。

建物跡について

今回確認した建物跡は、床面の平面形が円形で、そのうち1棟は6本の柱を持つものと考えられる。時期については土器が数点出土しており、これをもとに考えると、弥生時代中期後半～後期前半頃のものの可能性が高いと判断される。このことは周辺から出土した弥生土器の様相とも大きく異なる。ただし、前述のとおり遺構内外を含めいずれも小片のため不明な部分も多く、また一部にやや新しい要素・形態をもつものも見られることから、なお検討が必要であろう。

旧益田市域においては、弥生時代中期～後期の建物跡の調査例はまだ少なく全体的な様相が明らかでないが、その一端を示すものとして注目される。なお、正式な報告はまだされていないが、同一丘陵上で同じく後期と考えられる建物跡が確認されており、それとの関連についても今後検討していかなければならないであろう。

出土遺物について

出土遺物は時代に偏りが認められた。確認されたのは弥生時代～古墳時代・奈良時代～平安時代・江戸時代後半以降で、それ以外の時期の遺物についてはほとんど確認されなかった。

弥生時代～古墳時代の遺物として、弥生土器壺・甕、土師器甕が出土した。弥生土器は中期～後期、土師器は古墳時代前期に収まると考えられる。石見部の弥生土器については、近年の資料の増加により、それぞれの地域ごとで若干様相が異なることが明らかとなりつつある。今回確認したものの中には、23-1のように地理的に近い山口県（周防・長門）北東部出土の土器と形態のよく似たものも見られ、本地域の地域性を示す一例と考えられる。

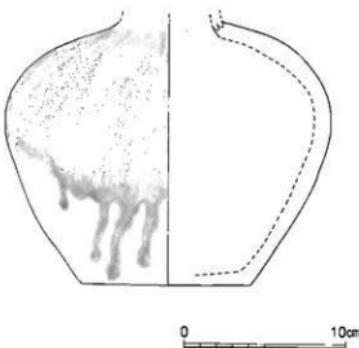
奈良時代～平安時代の遺物としては、須恵器壺・蓋が出土した。蓋は輪状のつまみをもつものが多いが、宝珠状・ボタン状のものも見られる。本地域の須恵器の編年についてはあまり進んでいないのが現状であるが、石見空港建設に伴って行われたものによれば、Ⅱ～Ⅲ期に相当すると考えられる。

ところで、本遺跡においてこの時期の遺構は確認されておらず、遺物のみの出土である点が注目される。こうした状況は同一の丘陵上にある根ノ木田遺跡やサガリ遺跡、庄屋東遺跡でも窺うことができる。もちろん隣接地に建物跡が存在する可能性も否定できないが、廿子Ⅲ遺跡周辺に限って言えばこの時期の遺構は確認されていない。どのようなことが背景としてあるのかは課題であるが、根ノ木田遺跡では他の出土遺物から仏教に関わる祭祀の可能性も考えられており、今後の検討をしたい。

江戸時代以降の遺物としては磁器・陶器が出土している。磁器では江戸時代末から益田で生産され始めた白上焼が見られる。白上焼は石見部で唯一焼かれた磁器であるが、窯跡等の調査は進んでおらず、流通等を含めた解明が待たれている。今回のものはその広がりを遺跡から確認するまでの資料と言えよう。陶器はさまざまな種類のものが出土しているが、図示したように灯明具と考え

られる製品が一定量を占めていた。戦前までは神社があった⁽⁵⁾といふことであり、それに伴うもの可能性が高い。

以上、若干の考察を行った。遺構・遺物とも量的にはそれほど多くないが、この地域での調査例はまだまだ少ないため、貴重な資料となるものと思われる。



第27図 庄屋東遺跡出土須恵器実測図 (S=1/3)

註

- (1) 益田市教育委員会 木原 光氏ご教示
- (2) 阿東町教育委員会「宮ヶ久保遺跡」1998
- (3) 島根県教育委員会「石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」1992
- (4) 註(3)に同じ
- (5) 三浦 厳氏ご教示

写 真 図 版

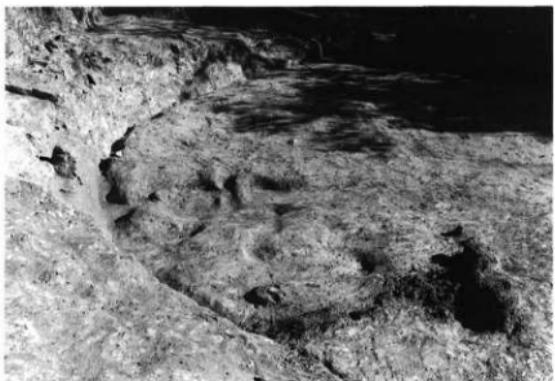
図版1



廿子Ⅰ・廿子Ⅲ遺跡全景（西から）



廿子Ⅰ・廿子Ⅲ遺跡全景（南から）



廿子 I 遺跡建物跡
(炭化物出土状況)



廿子 I 遺跡建物跡



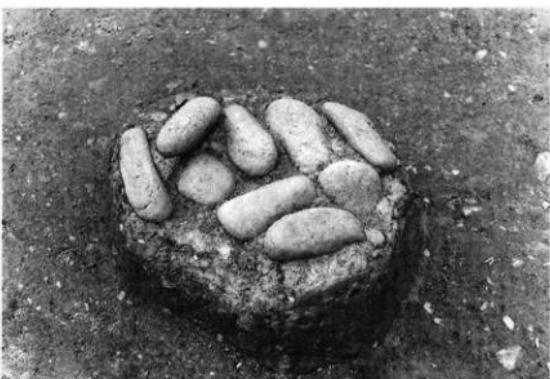
廿子 II 遺跡 (調査前)

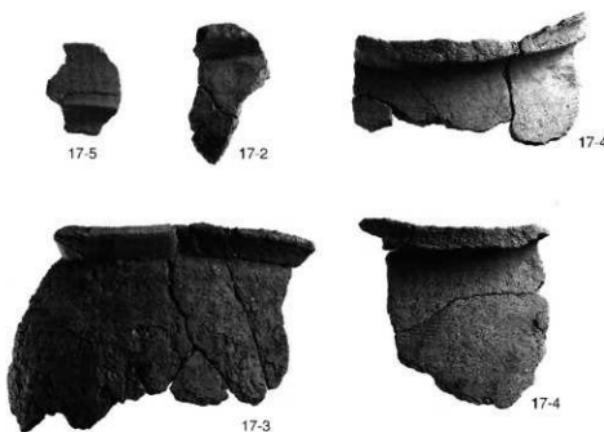


廿子Ⅲ遺跡建物跡遺物出土状況

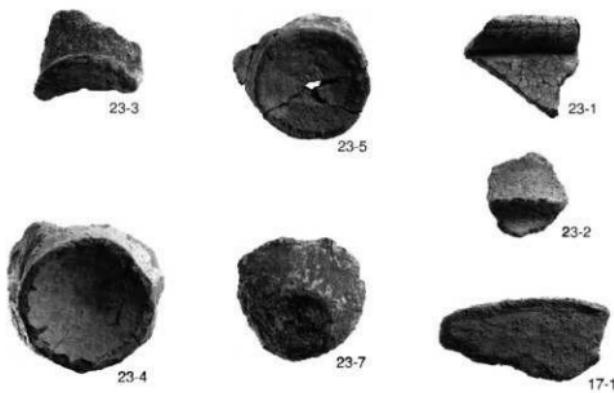


廿子Ⅲ遺跡建物跡 1・2

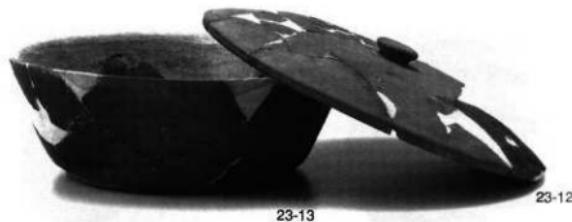




廿子Ⅲ遺跡建物跡出土遺物



廿子Ⅲ遺跡出土遺物（弥生土器）



廿子Ⅲ遺跡出土遺物（須恵器・陶器）



廿子Ⅲ遺跡出土遺物（錢貨）



25-58



25-57



廿子Ⅲ遺跡出土遺物（磁器）

報告書抄録

フリガナ	ツヅシイセキ・ツヅシミセキ							
書名	廿子I遺跡・廿子III遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	1							
編著者名	田原淳史・川崎英司・板倉芳郎							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL: 0852-36-8608 E-mail: maibun@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
廿子I遺跡	島根県益田市 飯田町	32204	Q283	34°40'20"	131°48'51" ↓ 131°48'52"	2001.11.26 ↓ 2001.12.21	700m ²	一般国道9号（益田道路）改築工事
廿子III遺跡	島根県益田市 飯田町	32204	Q285	34°40'17" ↓ 34°40'15"	131°48'47" ↓ 131°48'49"	2001.10.22 ↓ 2001.11.22 ↓ 2002.05.07 ↓ 2002.06.30	500m ² 1,000m ²	一般国道9号（益田道路）改築工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
廿子I遺跡	集落跡	弥生時代	建物跡					
廿子III遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 江戸時代	建物跡		弥生土器 土師器 須恵器 陶器 磁器			
要約	廿子I遺跡・廿子III遺跡は、島根県益田市飯田町に所在し、白上川左岸に面した低丘陵地に位置する。本書は、一般国道9号（益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査結果について報告したものである。 廿子I遺跡については、弥生時代後期頃のものと考えられる建物跡1棟を確認した。 廿子III遺跡については、弥生時代中期後半～後期前半のものと考えられるもの1棟を含む建物跡2棟、弥生時代～近世の遺物を確認した。							

一般国道9号(益田道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書1

廿子Ⅰ遺跡・廿子Ⅲ遺跡

2006年3月31日発行

編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

発行 国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

印刷 株式会社 島根県農協印刷